

ノンフォーマル教育プログラムの可能性

—ecological perspective な学習アプローチの視点と
国際ボランティアプロジェクト—

川 又 孝 徳

1. はじめに

これまで体験型学習を含めた協働学習は、大学教育のなかでも重要な教育手法として様々な形で導入されてきた。知識を静的なものとして捉えるだけでなく、体験や社会的相互行為を通して構築される動的な知識を認識し、気づきを促すアプローチとして、大学教育のみならず初等教育にも導入されてきた。学習者が能動的に学ぶ能力は、文部科学省（2008）が提唱する「生きる力」の重要な要素と認識され、小学校から体験を重視した学びに焦点が置かれ学習指導要領もそれと共鳴するように変更されてきた。

明星大学人文学部国際コミュニケーション学科でも体験型学習に加え、学生がグループで主体的に複数の課題に取り組む完遂するという、プロジェクト型学習のプログラムが多数開講されている。それぞれのプログラムの参加者は様々な問題に直面しながらも、それを解決する、あるいは解決する方法を考えることで動的な知識を構築することを目的としてきた。筆者も2つのプロジェクト型学習に4年携わってきたが、これまでの学習を振り返るうえで、毎年問題点と次年度への課題が挙げられた。そこで本稿では、過去のプロジェクト型学習プログラムに参加した学生のナラティブを用いて、プロジェクト型学習プログラムの問題点を分析したうえで、ドイツ、イタリア、フランスの国際ボランティアプロジェクトの観察データから、その問題点を解決するためのアプローチの一つとして、ノンフォーマル教育の重要性を議論する。

本稿では、ecological perspective (van Lier, 2010) に基づく言語学習の議論とノンフォーマル教育アプローチの概念を用いてデータ分析を行う。van Lier (2010) は、言語学習におけるこれまでのデカルト的な科学的視点の問題点を指摘している。デカルト的な科学的視点は、現実世界の多様性を単純

化し、研究を行うにあたってはデータを取捨選択する必要がある、複雑な説明よりも単純な理論で説明する事を奨励している。従って、言語学習とは言語の構造に注目し、単語、節、文といった構造を段階的に習得する事を目的とした学習を指していた。その一方で、ecologicalな視点とは、発言や発話される場面の状況や文脈によって単語や文章の意味が異なるという環境に注目し、人と関わる中で様々な意味が生まれる事で学びが深まるという学習のプロセスに注目した視点である。国際コミュニケーション学科のプロジェクト型学習プログラムは、社会文化理論に基づいた「状況に埋め込まれた学習 (Lave & Wenger, 1991)」が、プログラムの重要な柱の一つとして運営されている。状況に埋め込まれた学習とは、学習と意図的教授とを根本的に区別し、学習において社会的実践は欠くことのできない要素として、様々な体験を通してプロジェクトを遂行する (Lave & Wenger, 1991)。つまり、単なる知識を一方的に伝達するという方法ではなく、学習者自身が所与の状況や環境で他者との社会的相互行為を通して学習を促進するという学習理論にある。ecologicalな視点も状況に埋め込まれた学習も、これまでの学習理論との大きな差異は、学習が個人で完結するものではなく、他者との社会的相互行為を通して生まれるという概念である。プロジェクト型学習プログラムは複数存在し、担当する教員ごとに異なるアプローチを採用しているが、共有されている暗黙知としてこうした社会文化理論に基づき有機的にプロジェクトが運営されている。

2. プロジェクト型学習の問題点

この概念に基づいたプロジェクト型学習プログラムの参加者に、プロジェクト終了時にそれぞれの学びについてのナラティブを書くというタスクを行なった。今回は、ベラルーシフィールドワークというプログラムの参加者のナラティブを用いて、プロジェクト型学習プログラムで学習者が感じた問題点について議論したい。

まず、ナラティブから見られた学習の問題点は、2つに分類される。1 流目は、マネジメントの問題であり、2 流目はコミュニケーションの問題が挙げられる。マネジメントの問題には、プロジェクトの成果物を産出するため

のタイムマネジメントと成果物を産出するにあたっての過程で起こるチームマネジメントの問題が挙げられる。プロジェクト型学習の性質上、特定の期限内に成果物を産出する必要があるが、それまでのスケジュールの見通しの変更を余儀なくされることや、期限内に産出する事にものみ集中してしまい、成果物の質に対する評価や議論が十分になされないまま提出される事が、ナラティブデータから示されている。

前期に自分たち同士ではきちんと計画していたつもりでしたが、現地に行って色々聞いてから新たに作るってなった。土地勘がないから、行ったり来たりになっていた。(ミホ、2016、ナラティブ)

スケジュールを把握していなかった事もあったが、向こうの学生に自分たちのやりたいことが理解してもらえなかったと感じていた。向こうの学生は観光も兼ねてって感じで、それと filming の時間のバランスがうまくできたら夜遅くまで歩き回らなかったのかなとも思う。(ノリコ、2016、ナラティブ)

あまり自分の意見を出せなかった。ビデオにメンバーさんが出演しなかったことについて自分ではあれって思っていたが、時間もないのでまあいいやと思った。(コウ、2016、ナラティブ)

私達のチームはあらかじめストーリーなどを決めていて、役決めもしていたけど、スムーズに進むことはありませんでした。計画していてもその通りにうまくいかなかったの、前日にもっとどこで何をやるのかを改めて日本人同士で話し合っ決めておけばよかったと最終日になってから思いました。(ユキエ、2016、ナラティブ)

これらのマネジメントやコミュニケーション上の問題は、海外フィールドワークで頻繁に起こっていた。筆者はこれらの問題点を事前学習で構造的に教えることは難しいと考えていた。こうした問題はその時の状況や相手との関係性など複数の要素を含んで起こるものであり、事前学習の中で、例えばケーススタディとして取り上げ、授業を行ったとしても、現実で起こる問題との乖離が常にあった。

こうしたプロジェクト型学習での問題点の解決策の一つとして、筆者はノンフォーマル教育のアプローチが有効ではないかと考えた。ノンフォーマル教育とは、「正規の学校教育以外にある目的を持って組織された教育活動」(国

際協力機構, 2004, p. 6) と定義されており、特に発展途上国などでは、フォーマルな教育だけで解決できない生活の中で直面する課題を解決する力を高めるなど、持続可能な開発を目指す事を目的として導入されている。加えて、村松・村上 (2016) は、大学教育の中にもノンフォーマル教育のアプローチを導入する重要性を主張しており、大学におけるノンフォーマル教育を導入する事によって、学生同士、地域社会の様々な主体との対話と行動を通して、主体的に知識を獲得するプロセスが現在の大学教育に求められている、と論じている。しかしながら、村松・村上 (2016) も指摘しているように、現状のカリキュラムやアプローチの代替としてノンフォーマル教育のアプローチを取り入れれば問題が解決するわけではない。むしろ、フォーマルな教育とノンフォーマル教育をカリキュラムや学生の質に合わせて取り入れる事が必要である (丸山、2016)。そのため、筆者が運営しているプロジェクト型学習プログラムにノンフォーマル教育のアプローチを取り入れるため、2018年8月に3つの国際ボランティアプロジェクトを観察した。この3つのプロジェクトは一般社団法人国際教育交換協議会 (CIEE) を通じて開催されるノンフォーマル教育プロジェクトで、ドイツ・イタリア・フランスなど30か国で建物の修復、社会福祉、環境保護など活動の分野も多岐にわたるプロジェクトが開催されている (CIEE, 2018)。そもそもこの国際ボランティアプロジェクトは、第1次世界大戦後、それまで敵対していたヨーロッパ諸国の若者たちが、国境を越えて共同生活を送りながら協力して、戦争で破壊された農地や街を再建する平和活動を行う事を目的としてはじまったものである (CIEE, 2018)。その中で今回は、Freising、Georgensgmünd (ドイツ)、Alzate Brianza (イタリア)、Chantilly Gouvieux (フランス) で開催された国際ボランティアプロジェクトを観察した。それぞれのプログラム内容は、主に環境保全活動と教会の修繕と墓地の保全活動など個々に異なる。この3ヶ所の国際ボランティアプロジェクトでの観察とインタビューデータから、ノンフォーマル教育の5つの学習効果が挙げられる。

1. 学習の予測不可能性
2. 対話を通じた相互理解
3. 参加者中心の意思決定
4. 明確な達成目標

5. ecological perspective に基づく言語学習

学習の予測不可能性とは、環境保護や整備活動を通じた活動による学習が挙げられる。先述した通り、このプロジェクトの参加者はフォーマルに環境保全についての授業や教会、墓地についての歴史的・文化的背景について講義を受ける時間は設けられていない。実際に環境保全活動や修繕活動を行いながら、地域住民やプロジェクト参加者同士の話からその地域や場所の歴史的文化的背景を学ぶ。また、環境保全活動においては、実際に除草作業の際に、どの種類の草花を除草し、どの種類を残すかはその場で指示される。



図1 墓地の修繕活動と環境保全活動

国際ボランティアプロジェクトの目的は、環境保全活動、修繕活動となっているが、作業と同時に歴史的文化的背景を学ぶだけではなく、草花の種類や環境保護について体験から学ぶ。こうした体験から学ぶ項目や内容は参加者個人の興味や関心によって異なるが、参加者は単なる作業だけを行うのではなく、作業を通して学び、その学びはプログラム運営者もまた学習者自身も予測する事ができない。しかし、それぞれの参加者が何らかの学びを得られる、あるいは参加者が期待していた項目以外の学びなど様々な学びが、国際ボランティアプロジェクトに埋め込まれている。その学びは、実際の作業だけではなく、対話を通じた共通理解にも存在している。こうした国際ボランティアプロジェクトは、参加者は自身でテントや寝袋を持参して、その土地の体育館や教会などの共住空間で生活している。



図2 国際ボランティアプロジェクトの共住空間

夕食の後、どのプロジェクトも様々なトピックについて全員が議論する。一例をあげると、あるドイツのプロジェクトで行われたトピックは、LGBTについての議論であった。参加者はそれぞれの国でLGBTがどのように扱われているか、LGBTについての価値観についてのディスカッションが行われ、フランスのプロジェクトでは、難民の問題について議論されていた。そこでも参加者が自分の国や自分自身の経験に基づいて、難民についての問題が議論され、時には声を荒げる、ジェスチャーが大きくなるといった様子を見せながらも、お互いが難民についてどのように理解しているか、問題をどのように解決したら良いかなど議論していた。

自分がいかに自分の国について知らなかったかを改めて思い知った。あらかじめこうした議論が起こる事は説明されていたが、実際に参加すると何も言えない自分が恥ずかしいとサトル（日本人参加者）が話していた。（フランス、フィールドノート、2018/08/14）

ディスカッションの時は、スマホを見れないので内容についていくのが大変だ（ミチコ）。パトリック（キャンプリーダー）が自分が分からない顔をすると簡単な英語で話してくれるが、問題は英語が分からないのではなく、自分の国での問題が分からないからちゃんと勉強しておくんだと後悔している。と話していた（フランス、フィールドノート、2018/08/14）

こうした夕食後のディスカッションは毎晩行われ、様々なトピックが議論されている。日中の作業と夕食後のディスカッションでは、国際ボランティアプロジェクトでは他者との社会的相互行為を通して学習を促進する環境が醸

成されている。こうした環境は、運営するプロジェクトリーダーや受け入れ NGO が設定するのではなく、参加者と地域の住民と NGO が自然発生的に構築されるものである。いくつかの例をあげると、プログラムのスケジュールやキッチン・クリーニングの当番、買い出し、自由時間の使い方に至るまで、参加者自身が自主的に運営、参加している。プログラムの初日には、必ず全員集まってそのプログラムのスケジュールやキッチン・クリーニングの当番を決めるという話し合いの場が設けられている。参加者は必ずキッチンとクリーニングの当番を担当し、複数回料理をする、あるいは建物やトイレの清掃を行う。買い出しについても、キッチンの当番が担当し、与えられた金額の中で参加者全員分の食事を提供する。

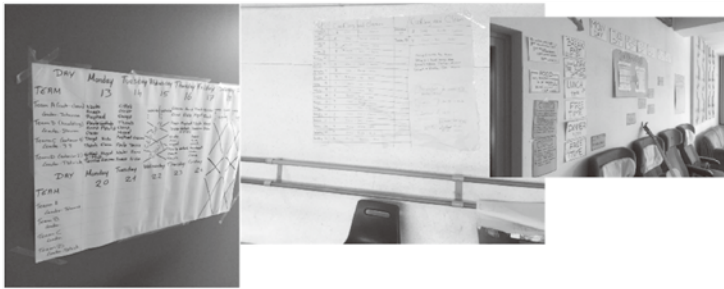


図3 国際ボランティアキャンプのスケジュール・当番表

こうした意思決定も、参加者との対話を通して行われている。例えば食事においては、どの国際ボランティアプロジェクトも参加者の出身国、年齢、性別、アレルギー等も異なるため、料理を作る場面においても、異なる背景への気づきのきっかけがあった。

ジェシカ（イタリア）はヴィーガンでアレックスはムスリムであるため、ファビオ（ギリシャ）が肉入りの料理をサミュエル（ドイツ）がベジタリアン用の2種類の夕食を作っている。買い出しはアンジェラとキッチン担当が行く。スーパーまではアンジェラが運転する。（ドイツ、ワールドノート、2018/08/07）

インタビューや図4で示されているように、誰かに管理されるのではなく自主的に組織運営を行い、不満や改善点があればフィードバックボックスに意見を入れ、次の日のディスカッションやミーティングなどで共有されるとい

う対話に基づいた問題解決を目指していた。



図4 フィードバックボックスとプロジェクトルール

そして、全てのプロジェクトに共通しているものが、成果や到達目標が視覚化されているという事である。環境保全活動については、雑草がなくなって山道や公園などが舗装されている事が一目で理解でき、修繕活動についても一目でその成果や到達目標が目に見えるため、自分たちの作業や活動の到達を実感しながら進める事ができる。そのため、全員が作業を進める際にも、視覚化された到達目標が示されるため活動の意義や理由づけが明確になっている。

一方で、各プロジェクトにも問題はあある。一例として挙げられるのが、地域住民との言語の壁が挙げられる。

Second was the barrier of the language. The problem was not my English with the others volunteers. The problem was the communication in English with the local hosts who speak a lot in Italian with my colleagues. So yes I did understand a lot of times Italian because now I am living there. But sometimes they spoke in Italian when I was not here. So I did not have all information and it was complicated to forward it to all volunteer. (Nolwenn, E-mail, 2018/08/15)

イタリアのプロジェクトに参加したフランス人参加者が語ったように、地域住民との言語の壁を感じる場面が多く、プロジェクトリーダーも受け入れ団体の言葉を話すため、様々な国から来た国際ボランティア参加者たちは、時にコミュニケーション上の問題を抱えていた。しかしながら、そうした問題

についても一定の理解を示し、こうした国際ボランティアプロジェクトが社会に果たす意義を見出している。

This work camp have a real necessity for our society. It helps local communities who need it. The created links between people from all around the world are so powerful for me. Even if we didn't have the same background, nationality, and culture, volunteers were together and came for the same project. And what is also powerful for me is the relationship between the local community and the volunteers. In my case, local people didn't speak English but they tried to create a link. They tried to communicate with us, they offered us a lot of food or drinks. We could notice that they feel grateful for helping them (Nolwenn, E-mail, 2018/08/15).

3. 考察

当然のことながら、単一のアプローチで国際ボランティアプロジェクトのような多様な背景を持った参加者の全ての問題を解決することは難しい。しかしながら、従来のようにデカルト的な科学的視点ではなく、ecological perspective に基づく言語学習の観点からこのプログラムを観察すると、地域住民や協働する国際ボランティア、キャンプリーダーなどとの社会的な相互行為によって言語を学習するだけではなく、プロジェクト参加者、開催地の文化背景や異なる価値観を持った社会との協働の意義、難民や環境保護、LGBT の問題など、現在の世界が抱える課題などを holistic な学習を国際ボランティアプロジェクトという環境から行うことが可能になる。また、その学習が社会的な貢献に繋がる事で、学習の目的や意義が明確になる事が期待される。

中央教育審議会大学分科会将来構想部会(2018)は「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」の中で、高等教育機関の教育研究体制について、大学を越えて多様な人的資源を活用し、新しい価値の創造できることを目指すと述べている。多様な学習効果が期待されるインフォーマル教育アプローチをフォーマルな教育の場面に取り入れていくためには、ecological

perspective に基づく言語学習のアプローチが必要ではないかと考えた。ecological perspective に基づく言語学習のアプローチは、社会文化理論に根ざした言語学習のアプローチとして大変意義深いものだが、どのようにこのアプローチを実践すれば良いか、またそのアプローチをどのように計画立ててシラバスに統合させていくかといった、具体的な実践についての議論はあまりない。丸山・太田 (2013) も柔軟な学校教育のアプローチとして、ノンフォーマル教育をフォーマル教育への導入を提唱している一方、ノンフォーマル教育は多様で柔軟であるがゆえに、捉えにくく扱いづらい概念になっている点を指摘している。加えて、体験学習プロジェクトの抱える問題点のもう一つが、学習と組織形成の矛盾が挙げられる (福島, 2010)。福島 (2010) はプロジェクトが体系的になり、組織的に円滑なプロジェクトは、学習の自由性が少なくなることを指摘している。つまり、体系的に組織された体験は、プロジェクト運営を円滑に行う事は可能になるが、プロジェクト運営に伴う困難さや失敗から学ぶという体験学習の重要な学習の要素を阻害する結果になってしまうという学習の観点からみると矛盾が生まれてしまう。

従って、こうしたプロジェクト型学習においては、必ず新しい要素を取り入れていく必要がある。プロジェクトの内容や参加者の多様性など、困難さや失敗が起りやすい環境を整える必要がある。事実、国際コミュニケーション学科の体験型プロジェクトの一部では、毎年同じことを行わないという理念のもと、常に新しい取り組みを導入している。そうでなければ、学習を阻害するだけでなく、経験者が権威となってしまう、プロジェクトの新しい参加者は権威に従うだけでよいという誤った認識を生んでしまう事になりえる。このように、大学を超えて多様な人材を活用し、新しい価値を創造するためには、教室内だけに留まってアクティブラーニングを行うという、いわば「模擬」的な学びではなく、異文化を含めた多様な環境での実践が重要である。その結果、新しい価値と新しい知識が創造されるのではないだろうか。

参考文献

- 一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会 (2018). 国際ボランティアプロジェクト 内容・参加費用 <https://www.cieej.or.jp/exchange/ivp/program/>
- 国際協力機構 (2004). 課題別指針 ノンフォーマル教育
[http://gwweb.jica.go.jp/km/FSubject0101.nsf/3b8a2d403517ae4549256f2d002e1dcc/d504c833153fe4a149257f8d001dca27/\\$FILE/%E8%AA%B2%E9%A1%8C%E5%88%A5%E6%8C%87%E9%87%9D%E3%80%8C%E3%83%8E%E3%83%B3%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%AB%E6%95%99%E8%82%B2%E3%80%8D\(H16\).pdf](http://gwweb.jica.go.jp/km/FSubject0101.nsf/3b8a2d403517ae4549256f2d002e1dcc/d504c833153fe4a149257f8d001dca27/$FILE/%E8%AA%B2%E9%A1%8C%E5%88%A5%E6%8C%87%E9%87%9D%E3%80%8C%E3%83%8E%E3%83%B3%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%AB%E6%95%99%E8%82%B2%E3%80%8D(H16).pdf)
(retrieved from October 15th, 2018)
- 中央教育審議会大学分科会将来構想部会 (2018) 今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1406578.htm (retrieved from October 15th, 2018)
- 福島真人 (2010) 『学習の生態学：リスク・実験・高信頼性』 東京：東京大学出版会
- 丸山英樹・太田美幸（編）(2013). 『ノンフォーマル教育の可能性：リアルな生活に根ざす教育へ』 東京：新評社
- 文部科学省 (2008) 学習指導要領「生きる力」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-ics/idea/index.htm (retrieved from October 15th, 2018)
- 村松 陸雄・村山 史世 (2016) 「ノンフォーマル教育は大学における持続可能な開発のための教育 (ESD) の触媒となるか？」武蔵野大学環境研究所紀要 (5), pp.43-57
- Lave, J. and Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation (Learning in Doing: Social, Cognitive and Computational Perspectives)*. London: Cambridge University Press
- van Lier, L. (2010). The ecology of language learning: Practice to theory, theory to practice. *Procedia – Social and Behavioral Sciences*, (3), 2–6

謝辞

今回の国際ボランティアプロジェクト視察では、人文学部国際コミュニケーション学科の先生方にその機会を頂きました。また、一般社団法人国際教育交換協議会 (CIEE) の川田純也様、甲斐愛望様には国際ボランティアプロジェクト視察のご紹介など様々にお世話になりました。先生方並びに CIEE の皆さまには厚く御礼申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。